

| マレビトの会 次回公演 |

「長崎を上演する」

2016年3月26日（土）～27日（日）

愛知県芸術劇場 小ホール

詳細は、決定次第ウェブサイトにてお知らせ致します。

| マレビトの会 marebito theater company |

2003年、舞台芸術の可能性を模索する集団として設立。2009、10年に被爆都市である広島・長崎をテーマとした「ヒロシマーナガサキ」シリーズ（『声紋都市—父への手紙』、『PARK CITY』、『HIROSHIMA—HAPCHEON：二つの都市をめぐる展覧会』）を上演。2012年には、前年の3月に発生した震災と原発事故以後のメディアと社会の関係性に焦点を当てた『アンティゴネーへの旅の記録とその上演』を発表した。

2013年より、複数の作者がひとつの都市をテーマに戯曲（ドラマ）を書き、その上演を行う長期的な演劇プロジェクトに取り組む。2013～2015年度にかけて「長崎を上演する」と題した上演会を実施。今後は、広島、福島へ対象を移し、プロジェクトを継続していく予定。

「ヒロシマーナガサキ」シリーズ以降、集団創作に重きを置くとともに、展覧会形式での上演や、現実の街中での上演、インターネット上のソーシャルメディアを用いた上演など、既存の上演形式にとどまらない、様々な演劇表現の可能性を追求している。

web : <http://www.marebito.org/>

facebook : <https://www.facebook.com/MarebitoTheaterCompany>

Twitter : https://twitter.com/marebito_org

| お問い合わせ |

E-mail : info@marebito.org

| マレビトの会 プロジェクト・メンバー（2015） |

アイダミツル、生実慧、稲田真理、遠藤幹大、大庭裕介、上村梓、駒田大輔、佐藤小実季、鳥崇、鳥田佳代、田中夢、谷岡紗智、中村みなみ、中山佐代、西山真来、松尾元、松田正隆、三宅一平、森真理子、山田咲、弓井茉那、吉澤慎吾、吉田雄一郎

| 照明 |

片田好美

| 記録写真 |

西野正将

マレビトの会

『長崎を上演する』

2015.8.14 (Fri.) -16 (Sun.)

立教大学 新座キャンパス 6号館ロフト1

- 構成表 -

8/14(Fri.)

鷺尾がみた長崎①

新地バスターミナルの待合所

十人町 朝永のアパート①

坂の上の兄妹

水辺の森公園

十人町 朝永のアパート②

鷺尾がみた長崎②

生徒たち

8/15(Sat.)

交通難民①

稲佐山下る

富岡と松田

交通難民②

原爆落下中心地

ソウル ミーツ ボディ

風頭公園下る

あるバーにて

8/16(Sun.)

ピワと魔法

浜町アーケードのサンマルクカフェ

ノニちゃん

信平とみ緒

神林の行方

フレンチレストランにて

追悼施設にて

※上演戯曲はマレビトの会ウェブサイト

(<http://www.marebito.org/>)に掲載しています。

-松田正隆

「長崎の人の行為」をマイムする

普段、私たちは「行為」を目的への手段としてもちいる。「食べる」という行為は、たとえば空腹を満たす目的で行うのだ。その行為は目的に従属している。

では、演劇では「食べる」行為はどうなるのか。それは観客に見せるためにある。「食べる」行為を「見せる」ということは、どういうことか。「食べる」を再・呈示(表象)するということである。チョコレートや、スパゲッティを、フランス料理を、口へと運ぶ動きを模倣して行う。その口へと運ぶものに見合ったさまざまなマイム(ものまねの身振り)等から、総合して、なにを食べているのかが観客に認定されるのである。

なぜそんなことをするのか。当たり前だが、俳優は空腹を満たす目的への手段として「食べる」行為をするのではない。かと言って単に、なにかを食べていることが観客にわかればいいというわけでもないだろう。さまざまな行為の積み重ねを見せることで俳優が演じる登場人物のおかれた状況を呈示すること。そのとき、「行為を見せる」ことは登場人物のおかれた「状況の呈示」に寄与しているのではあるが、その状況を見せるという目的のための単なる手段というわけではないのだ。ダンスやパントマイムとまではいかななくても、演劇においても発話と同様、俳優の所作、身振り、立ち振る舞いはとても重要な構成要素なのである。

演劇において「行為」は、その行為自体をどのように見せるのか、ということで問われることになる。「食べる」ことを表象してはいるものの、ほんとうには食べているわけではないのだから、その食べようが、「食べるの呈示」の仕方が問題となる。つまり舞台上の行為自体がどのように見られるのかが目的となること。それが演劇の美学的な判断基準になる。ここでは、行為は手段ではなく、その行為の呈示自体が目的なのである。ほんとうに食べているように見えることがよしとされれば、リアルな食べっぷりが要請される。いや、ほんとうに食べているときよりも、「食べる」行為が前景化され、「食べる」がドラマチックに問題提起されている、ということになったりする。そのようにして行為を洗練させること。稽古を通して、俳優の動きを開発し安定させること。ユニークな演技の仕方でも、「食べる」が演出されること。ほとんどの演劇は、そういう「行為の見せ方」の面白さを主題としているようだ。

しかし、それでいいのかという思いがきまとうのだ。「食べる」と認定されるためにある「食べるのマイム」のことを慎重に考える必要がある。演劇の行為を見せることが、自明のこととなっていないか。このような言い方は奇妙でもどかしいのだが、なぜ、演劇の「食べる」はこのこと自体、食べる自身をそうまでして呈示しようとするのか。「食べる」ことへの接近(食べるのが成り立つこと)にばかり目を奪

われて、見落としているのは、演劇の「食べる」に必然的につきまとう未熟さと言うか、「食べる」への至らなさと言うか、食べそこないの「食べる」なのである。決して「食べる」に到達しない「マイム」のほうを感じるべきではないか。

経験上(日常の食べるという経験から)、そこ(舞台)で行われている「食べるのマイム」は「食べる」こととして認知しうるのだが、あまりに当然のようにして「食べる」が舞台上で実現できていない(その行為は食べまねにすぎない)としたとき、なにが起こっているのか。それを、経験を超えて思考することはできないか。そのような舞台空間を呈示したとき、私たちの感覚はどうなるのか。そこで生成されるものはなにか。言い方をかえると、戯曲上の人物や出来事は、舞台上ではうまく実現できないが、その実現できなさを真っ当に舞台上で呈示することは、むしろ積極的な演劇表現としてありうるのではないか、ということである。演劇は、反・実現がなされる表現なのではないか。

「食べる」をマイムするということは「食べる」を「食べる」手前で実現させず、「食べる」が現前しないで「食べるのマイム」のままにしていることなのだ。ただし、決して、その「食べるのマイム」が上手に洗練された美的な振る舞いになってはならない。なぜなら、美的なものとしてそのマイムは成就してしまうからだ。「食べるのマイム」のままの持続であること、そのとき、「食べるのマイム」は「食べる」と「マイム」に分離し、食べるという意味のほうは脱色され、マイムは舞台空間に少しずつ意味を失いながら推移する。それでも「マイム」は「食べる」から離れられない。そのようにして「食べるのマイム」はゆらぎ、振動している。

マイムは「長崎を上演する」における重要な構成要素の一つ、俳優と登場人物を超越したアクターである。それは、地と図のように上演空間と相互に関係し合い、そこを特異な場所に創造するのである。俳優の動きは「食べる」「飲む」「歩く」「すわる」「立つ」「話す」「見る」「祈る」等の動詞へ(あるいは美しいものへ)と認定する視覚のみに支配されてはならないのである。審判のいる「いま・ここ」という凝固した現在時に還元されないで、行為を厚みの感触をとまなうイメージの空間のほうへ差し出すマイムの棲む場所。そこそが演劇の皮膚の生成の場であると思われる。だが、紙幅も尽きた、その皮膚については書く機会をあらためたい。

○本プロジェクトを始めるにあたって

『長崎を上演する』プロジェクトを始める際、私たちは「ドラマ演劇」を再検討することを一つの柱とした。ここでいう、ドラマ演劇の再検討とは、「劇の起きる場所と時間について、厳密に考える」ことであった。ドラマ演劇の可能性を、物語の時間と舞台の時間、この二つの時間の重なり合いからもう一度見つめ直そうとした。

しかし、ドラマ演劇といっても、それは「筋」のある大きな物語ではない。そもそも劇作家が複数いる。そして、劇作家たちは長崎へと赴き、それぞれの目で経験したことに基づいて戯曲を書く。そこには申し合わせはない。したがって、各戯曲につながりはないし、それぞれの作家がつくりあげた登場人物たちは一つの作品内に収まっている。ただ、戯曲に関しては、ドラマ演劇の核とも言える「対話」に重きを置くよう各自が努めた。

また、本プロジェクトは、長期的に展開していくことを当初より計画していた。年を経て、幾つかの公演が行われ、戯曲が堆積する。その積み重ねによって、このプロジェクトが豊かに広がっていくことを目指した。

○2つの試演会をふまえて

2013年9月に本プロジェクトは始まり、つづく2014年3月の二回目の公演まで、作品名をつけず「試演会」と称していた。文字通り、試行の場であった。

この二つの公演で、私たちが直面したのは身体の問題だった。私たちの舞台は、全く簡素なものである。所謂、小道具は一切使わない。使う「道具」と言えば、せいぜいパイプ椅子など劇場内でまかなえるものだった。つまり、俳優は小道具なしに、その対象物を表現しなければならない。しかし、パントマイムのようにあたかもその対象物が存在すると明瞭に認識できるような仕草では表現しなかった。むしろ、パントマイム未満の、不明瞭な身体の動きであり、その在り方を「疎かな身体」と私たちは呼んでいた。演技する際に生じる「模倣」という行為は、冒頭で述べた、演劇の持つ二つの時間性と対応する。疎かな身体によって、過去の再現でもなく現在時のリアルでもない、ドラマの時間が体現されていた。

○その後のプロジェクトの展開

2014年8月の公演からは、プロジェクトを『長崎を上演する』と名づけ、徐々に形式を獲得していった。同時に、非リアリズム的な演出（例えば、座っているのに立ったまま演技するなど）、ダイアローグをほとんど排した演目など、上演ごとに差異をつけ、緩やかな実験を行っていった。

上演形式を踏襲しながらも、検証を重ねることで、劇の輪郭線が徐々に描かれていく。しかし、それは素描のように、あいまいな線であった。

○ドラマ演劇を省みて

ここでドラマ演劇についてもう一度振り返りたい。集まった戯曲は、お互い似ても似つかないドラマであった。それらは全体に奉仕することのない無数のドラマである。それぞれ劇という統一したフォルムを持っていても、それらを乱暴につなげて、全体を俯瞰すれば、反ドラマ的な筋のないもののように見える*。

本プロジェクトのドラマ演劇では、物語ではなく、対話、そして、行動に主眼を置いていた。ドラマ演劇を取って細分化し、対話や行動を取りだして、演劇を捉えたとき次のようなことが起こる。それまで取るに足らない会話だったものが、「演じる」というフィルターを通すことで、認識に不測の事態を生じさせるのである。私が見ているものは何ですか、と。ある場面が、俳優の些細な身体のゆらぎが、ドラマとも言えないものをドラマへと変容させる。この転変にこそ私たちが考えるドラマ演劇の可能性があるのかもしれない。

* 実際の上演を経て、本プロジェクトが短編を集めたオムニバス作品ではなく、一つのまとまりをもった束に感じられたことは驚きであった。文体や展開などがまったく異なる戯曲が、一人の俳優が複数の役をもって演じられるとき、そこには確かに連なりがあった。それは劇場(ブラックボックス)が劇を包含する、あるいは、長崎という場所が各ドラマを覆っていることの一つの効果かもしれない。

- 山田咲

- イマジナリーな86人の長崎市民 -

真のマイノリティは常に言語化の外にいて、だれにも語られないし、自分をそれとして認識する手立てもないので必ず黙っていると以前書いた⁰¹。マレビトの会が、上演という未決定性に満ちた場で実現しようとしているのは、俳優と観客を「真のマイノリティ」化することである。

それは観客にとっては、日常の認識のタガが外れてしまって、舞台上で起こっていることは異常事態ではないし演じている俳優がそこにいるだけなのに、俳優と登場人物が同程度に現れて認識が攪乱され、自分が劇を見ていることを理解しながら「いったい何を見ているんだろう」という感覚になることである。これを「再認の失敗」とか「宇宙的身体が現れる」と呼んだ。

他方、俳優にとってそれは想像力と運動神経をつかって上演空間と的確な距離を取り、自分の肉体の上に戯曲の時空を受肉⁰²させることである。そうした受肉によって現れる存在たちは、俳優でもなく登場人物でもなく、イマジナリーな長崎市民として、語られない真のマイノリティとして彷徨(さまよ)いでる。

2年間にわたる『長崎を上演する』プロジェクトは、イマジナリーな長崎市民を合計86人生み出した。演じる俳優は10人なので一人当たり平均8~9人の生産量だ。

この上演の目的は真のマイノリティの創造であり、さらに冗談めかして言っているうちに本気になってきたのだが、その数を上演によって増やし人々の認識に革命を起こす事だった。真のマイノリティたちが共生する社会を実現するための世界的認識革命を起こすのに86人で足りるかどうかはわからないが、少なくとも彼らを永らえさせる手立てが観客の側にもあることは間違いない。革命未だ成らず。

さて今回は総集編ということで、今まで『長崎を上演する』で上演した戯曲をすべて再演する。合計20本。そしてそれらを暗転は挟まずに続けて上演する。俳優たちは、自分がやってきた登場人物を基本的には全部演じる。だから、その戯曲がいつ次の戯曲に移ったのか、俳優がいま演じているのはどの役なのかすぐには判別できない瞬間が多々ある。稽古場では、その宙づりになった時間の最中、特にイマジナリーな人々が現れてくるように感じた。

長崎という都市と、これほど膨大で一挙には捉えきれないしかし日常会話のスケッチに根ざした諸々を描いた戯曲の時空の広がり、上演空間で重なり発生した長崎人たちは語られず、また黙し、この世のあらゆるところに遍在するマイノリティたちと同じように現れたり消えたりしている。

-

註

01 | マレビトの会 HP 内 長崎を上演する vol.4 当日パンフレット『マイノリティのためのモニタリングワークショップ』

02 | 戯曲の空間と劇場の空間が俳優の身体の上で重なっている状態のこと。

(マレビトの会 HP 内 長崎を上演する vol.4 当日パンフレット『演劇の皮膚』による)

|CAST|

『鷺尾がみた長崎』

作：三宅一平

鷺尾：生実慧

男：大庭裕介

女：上村梓

ベンチの女・森の住人：西山真来

ブティジャン神父・店員：駒田大輔

少年：アイダミツル

-

『新地バスターミナルの待合所』

作：島田佳代

稲森：田中夢

朝永：弓井茉那

折江：生実慧

アナウンス：佐藤小実季

-

『十人町 朝永のアパート』

作：島田佳代

朝永：弓井茉那

浅野：島崇

ウラカミ：佐藤小実季

『坂の上の兄妹』

作：松田正隆

兄：大庭裕介

弟：生実慧

妹：上村梓

女：西山真来

男：駒田大輔

-

『水辺の森公園』

作：島田佳代

稲森：田中夢

父：大庭裕介

母：上村梓

-

『生徒たち』

作：遠藤幹大

斎藤：島崇

橘：西山真来

桑野：弓井茉那

小宮山：佐藤小実季

田中：生実慧

『交通難民』

作：アイダミツル

嘶家：大庭裕介

落語好きの青年：生実慧

港公園のおじさん：吉澤慎吾

港公園のおばさん：弓井茉那

バス会社のスタッフ：佐藤小実季

-

『稲佐山を下る』

作：稲田真理

男：大庭裕介

女：上村梓

-

『富岡と松田』

作：谷園紗智

ワタシ（富岡）：西山真来

松田秋子：上村梓

『原爆落下中心地』

作：稲田真理

男：大庭裕介

女：上村梓

-

『ソウルミーツボディ』

作：松田正隆

梅津正史：生実慧

加納栄太郎：島崇

古賀明日香：佐藤小実季

北園きらら：西山真来

戸田かおる：上村梓

田代菜々子：弓井茉那

熊取佳子：田中夢

門衛・DJ・パークカウンター係・長崎市民：吉澤慎吾

-

『風頭公園を下る』

作：稲田真理

男：大庭裕介

女：上村梓

-

『あるバーにて』

作：三宅一平

坂田二郎：吉澤慎吾

佐々木ふう：田中夢

鷺尾和男：生実慧

児玉太一：島崇

鈴木聡：大庭裕介

小窪啓介（クボ）：駒田大輔

-

『ピワと魔法』

作：谷園紗智

菊池京子：田中夢

安藤みつき：上村梓

露店の店員：生実慧

-

『浜町アーケードのサンマルクカフェ』

作：島田佳代

磯島：大庭裕介

永井：島崇

『ノニちゃん』

作：アイダミツル

兄さん：駒田大輔

ノニちゃん：アイダミツル

車掌：生実慧

-

『信平とみ緒』

作：松田正隆

鈴木信平：吉澤慎吾

鈴木み緒：上村梓

-

『神林の行方』

作：遠藤幹大

無島：駒田大輔

陽都：大庭裕介

神林：生実慧

川崎真実：田中夢

『フレンチレストランにて』

作：松田正隆

西岡充：大庭裕介

西岡公平：生実慧

桑野和泉：西山真来

シェフ：駒田大輔

その妻：上村梓

-

『追悼施設にて』

作：松田正隆

警備員：吉澤慎吾

来訪者たち：大庭裕介

生実慧

島崇

上村梓

西山真来

弓井茉那

佐藤小実季

三宅一平

アイダミツル

山田咲

駒田大輔

田中夢

| 活動情報 |

- 松田正隆、中村みなみ

立教大学心理芸術人文学研究所 映像生態学プロジェクト チーム4

『Dialog/Dance/Diary 身体とイメージをめぐる演劇祭 in 立教』

参加アーティスト：松田正隆、高山明、チョン・ヨンドゥ

2015年12月5日（土）

立教大学新座キャンパス

<https://www.facebook.com/RikkyoTheaterFes>

- 山田咲（再構成・演出）、佐藤小実季（出演）

DEAD THEATER TOKYO 第2回公演『ペンテジレアー／パラタクシス』

作：ハインリヒ・フォン・クライスト

2015年10月10日（土）～11日（日）

SUBTERRANEAN

<http://deadtheatertokyo.strikingly.com/>

- 大庭裕介、弓井茉那（出演）

SPAC×アトリエ・コンタンボラン『室内』

演出：クロード・レジ

2015年10月2日（金）～4日（日）

KAAT 神奈川芸術劇場 大スタジオ

http://spac.or.jp/interior_2015.html

- 鳥崇（代表、演出・振付）

『『私』の病める舞姫プロジェクト』

来季に向けて活動中

<http://watashinoym.strikingly.com>

- 田中夢（出演）

立教大学現代心理学部映像身体学科

2015年度 松田正隆ゼミ卒業制作『東京ノート』

作：平田オリザ 演出・脚色：福井歩

2015年10月2日（金）～10月3日（土）

立教大学新座キャンパス ロフト1

- 西山真来（出演）

Hauptbahnhof アトリエ劇研共催公演『スケール scale』

2015年8月28日（金）～30日（日）

アトリエ劇研

- 弓井茉那（出演、進行）

即興実験学校メンバーとして即興演劇のショーとWSに毎月出演中

「定期ショー」

毎月第三火曜日 20:00～阿佐ヶ谷・我無双／高円寺スタジオKなど

「座・高円寺提携インプロワークショップ」

毎月第二土曜日 座・高円寺

- 吉澤慎吾（出演）

アーキタンツ『音楽とダンス』<Music sign / Dance Desing>

2015年8月27日（木）

東京ウイメンズプラザ ホール

小池博史ブリッジプロジェクト『幻祭前夜～マハーバーラタより～』

演出：小池博史

アジア3都市+日本凱旋ツアー公演

2015年12月6日（日）～16日（水）

吉祥寺シアター

- 中村みなみ（制作）

マグカル・シアター in KAAT

趣向『THE GAME OF POLYAMORY LIFE』

戯曲：オノマリコ 演出：桐山知也 監修：深海菊絵

2016年1月21日（木）～24日（日）

KAAT 神奈川芸術劇場大スタジオ

<http://www.shukou.org/shukou/shuko.html>

- 中山佐代（制作）

相模友士郎『ナビゲーションズ』

構成・演出：相模友士郎 出演：佐藤建太郎

2015年9月25日（金）～27日（日）

ST スポット横浜

<http://www.sagami-endo.com/navigationst/>